

続 江戸時代の帯の研究

— 地質及色目文様について —

The Study of the Obi, Sash Belts in the Edo-period.

森 山 和 美

序 文

本 論

古来から日本の服装に着用されている帯は、和服にとって重要な装飾的役割を果たしていることは、前号に述べた通りであるが、服装が洋装化した今日では、後ろで結ぶ帯は、若い人の和装のなやみの種のようにである。「帯がしめられないので」という言葉をよく耳にするが、年々帯の結び方は派手になり、その文様も古典的な荘重なものが好まれているようである。このような日本独特の帯が外へ表はれるようになったのは、桃山時代からのもので、特に帯として大きく発展した江戸時代の帯巾とその結び方については、前に記したが、この度は帯の歴史の変遷と、江戸時代を中心とした地質、色目、文様などについて、記述してみたいと思う。

まず変遷であるが、帯は紐が発達したものではないかと考えられる。石崎忠司氏の「帯の歴史」には、帯という言葉の語源は「お」は「緒」「び」は「むすび」であると、「日本釈名」にあると記されている。原始時代の人々は、衣服の前やすそが開かないように、細い紐状のものを腰にしめ、前、あるいは横、後ろなどで結んで、その余りを垂らしていたようだ。古語の「たらし」と云うのは、帯のことで、古事記や日本書記では、帯という文字を「たらし」とよんでいたと云う。このように別の意味から紐が生まれ、発達して帯になったとも考えられる。

奈良時代の女性の衣服は、上下二部式に分れていた。これは中国、朝鮮の影響によるものである。この時代の帯は、倭しず文布うと呼ばれる横縞の細巾の平くけ紐が用いられたと考えられる。巾は一寸五分(5.7cm)

から二寸(7.6cm)位の中であつたと思われる。この織物を帯に用いたことは、万葉集卷十一にも「古の倭文機帯を結び垂れ、誰とふ人も君にはまさじ」とあるのでも分かる。かの高松塚古墳の壁画の女性の姿も組紐をしている。奈良、平安時代には、服装上のきまりとして、男子では正装(束帯)の時にする石帯せきたいがあるが、略装、平常には、織物の帯を用いたようで、多くは綺かんぱた、錦が材料として使用された。錦が使用されたことは、万葉集卷十一に「垣ほなす人は云へども、高麗錦紐解き開けし君ならなくに」「高麗錦紐解き開けて夕だに、知らざる命恋ひつゝかあらむ」とある。又婦人の外出着の壺装束つぼの掛帯は、赤い細紐を肩から垂らした。これは厳密に云えば帯ではない。庶民の女子は古くから手なしの短い筒袖式の服装に、「褶しひら」と云う腰巻式のものをもとって、紐を用いたらしい。

鎌倉時代の帯は、絹か施あじふの細帯で浅紅などのくけ紐を、前か脇に結んで用いたようである。

戦国時代(織田信長の天下統一迄)は国をあげて戦乱の甚となった時代であるから、風俗も全く統一をかき、混乱した時代である。この間に南蛮、支那、朝鮮との貿易は興隆して、各種の織物が招来され、職工も我国に漸次来朝して、堺の津で各種の織物を織り出し、周防の山口に於ても、染織工業が勃興し、堺の職工は京都の西北白雲村雲の地に移って、こゝに大規模な染織が起つた。これが西陣織嚆矢コウシである。この頃の帯地としては、錦、金襴、緞子、縮緬、縮珍、綾正、木綿は大永年間から相模で製出された。この時代の帯はすべて細いくけ紐で、「宗五大草紙」「女房筆記」に、古くは六つ割であつたが、八代

義政の時から八つ割にされたとある。その後、西陣織は秀吉の奨励によつて盛になり、今日に到るまで、帯地その他の織物に使用されてい

る。

安土桃山時代には、現在の和服の源流となつた小袖が急速に発達し、女子の服装は小袖の着物に細帯が多く、前で結び垂れていたが、小袖の形態は、身巾、おくみ巾は共に広く、袖つけ長く、振がなかつたので、おのづとくけ帯が用いられていた。寸法は巾一寸五分(9.7cm)から二寸(7.6cm)位で、芯に紙を入れたらしい。和服の帯として初めて登場したのに、桃山時代の名護屋帯なごやがある。松浦屏風の絵には、男女とも同じ位の中帯をしている。この名護屋帯は明から肥前(佐賀県)の名護屋に渡来したもので、太さ約一寸(2.5cm)長さ一丈余り(370cm)紐の両尖端には豊かな房がついている。(前述)それを腰のあたりに幾重にも巻きつけて、後ろ又は前で結んだもので、その様子は、彦根屏風をはじめ浮世絵などにも描かれている。「その色は白あり、紅べにあり、青、黄、赤などの交つて彩色したるものあり」と骨董集にも書かれている。この帯を用いたのは若い女子か遊女であつて、一般にはあまり用いられなかつたようである。又女官や御殿女中の用いた「附帯」があるが、地質は金襴が多く用いられ中に芯を入れて、袋状にして結んでいたとある。この様に女性の帯には、色々工夫されたものがあつたが、男の帯は巾が狭く、「くけ帯」や「真田紐の帯」を用いたらしい。落穂集に、「江戸の昔をいうに郷村の百姓ども目もあてられぬ有様なり。男女共身に布子ぬのこと申物を着し、繩の帯を着し、わらにて髪を束ねたる者ばかりのやうに之有候由、「云々」とある

が、これらは江戸のみならず、国内到る所の地方の実況であったと思われる。

さて今回も江戸時代の帯風俗を前巻と同じく三期にわけ、前期を江戸幕府開府より正徳まで、中期を享保より天明まで、後期を寛政以降幕末（慶応）まで、とする。その風俗の特色は、前期は幕府創業当初の意気軒昂な風潮を反映して、混乱と窮乏の中から新しい江戸文化が芽ばえ、混沌の中から町人文化が発達して、雄健豪華な元禄町人風俗が生れた。この当時はなお武家に対抗する意識が強く底流していたので、風俗の上にもその徴候が多く見られる。武張ったもの、奇矯なものが好まれ、模様なども、華麗な大柄なものが流行した。これらの風俗は、武家や富裕な町人、或は歌舞伎役者たちに好まれた。

中期は悠然として自信に満ちた町人生活を反映し、前期の中頃から経済の実権を握った町人が、市民の代表者であることを自覚し町人風俗を独自の立場で確立したのが、この期間である。中期の風俗が上方依存を脱して、江戸中心になったのは、江戸浅草蔵前に住んだ札差仲間であった。札差たちの横道ぶりは、元禄の大町人たちとは又別の野性味があった。中期の風俗は彼等の極道ぶりが絶頂に達した。安永、天明にあって江戸風俗の多種多様、艶麗無比な風俗がこの時期である。

後期は集大成された風俗を洗練陶冶し、落ついた心境が後期の風俗全体を支配している。文化、文政から天保へかけての清楚な趣味、嗜好みとなり、寛政頃から文様も簡素になったが、これは寛政元年の奢侈禁止令によるものである。上には木綿を使いながら、裏には上質の

羽二重を別に詠えて染めたり、ひいきの画師に画を描かせたりして、目に見えない贅沢をしたのが、後期の通人の服装の好みであった。中期の華美に対する反動も大きかったので、絢爛とか華美と云った好みを超越した表面素材に見える趣味の底に無比の技巧を隠しているのが、後期の風俗の特色である。次に各期の帯の地質、模様を述べたい。江戸期に入ると、女性の服装は小袖に帯姿と云う簡略なものとなったが、寛文以降元禄にかけて女性の小袖は華麗、贅沢なものとなり、帯も小袖に合わせて、豪華絢爛なものに発展していった。帯の巾は男子のは一体に巾狭く、女子のが広がった。「独語」（大宰春臺）には寛永頃の帯は鯨尺二寸ばかりで紙を芯としたことが記され、寛永十九年刊「あづま物語」には、当時の遊女の帯の巾を五ノ六寸（16.9 ~ 22.7cm）と記している。これは帯の巾は遊女などから広くなったと思はれる。寛文から延宝にかけては緞子三ツ割、二ツ割として長さ一丈二、三尺（49.5 ~ 49.2cm）、巾も丈も大となった。（昔々物語）これは延宝の名優上村吉弥から始まったようで、上村吉弥が三月十八日京都の祇園町のさる家から、花見に道ゆく人々の姿を眺めていると、東洞院の浮世紺屋のお春という名題の娘が、帯の結び方を唐犬の耳の垂れたように結んでいたのにヒントを得、これから帯の両端に鉛の錘を入れ、帯を一丈二尺（49.5cm）の長さとして舞台上演じたので、「吉弥結」という名で評判になった。（前述）この「吉弥結」は結目垂下の先斬をした点では風俗史上に重大な意義があると思われる。「吉弥結」は後には全く形が変わって結方は斜となり、元禄の吉弥結の右手の上ったものとなり、腰元結といって腰元に結ばれたが、現代でも京都

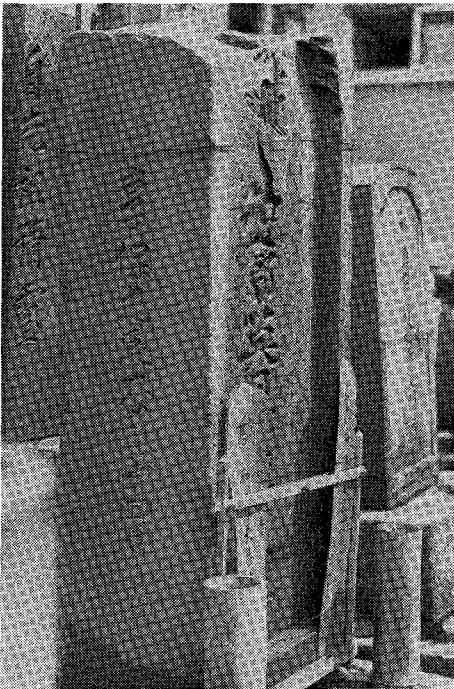
では「キッチャ」といっている。このように上村吉弥から女帯の結び方が、芸術的、装飾的となって、長さ、巾が共に広く長くなつたと考えられる。

風俗研究28号、若原史朗氏の上村吉弥考によると、「吉弥の墓は、京都裏寺町蛸薬師南入西側、浄土宗常楽寺の墓域、東高壁際から二墓列目の南から六基目に西面して建てられてある。高さ二尺四寸(90.9cm)中九寸七分(36.7cm)厚さ六寸(22.7cm)の墓石で、正面に知郭英恩信士の墓、向って右側に家紋と上村吉弥墓、左側に享保九辰六月十四日の文字が刻まれている。この墓石が同寺の墓地石垣中に、石垣の一つとして積まれているのを同氏が発見されたのが大正十年の冬と記されている。

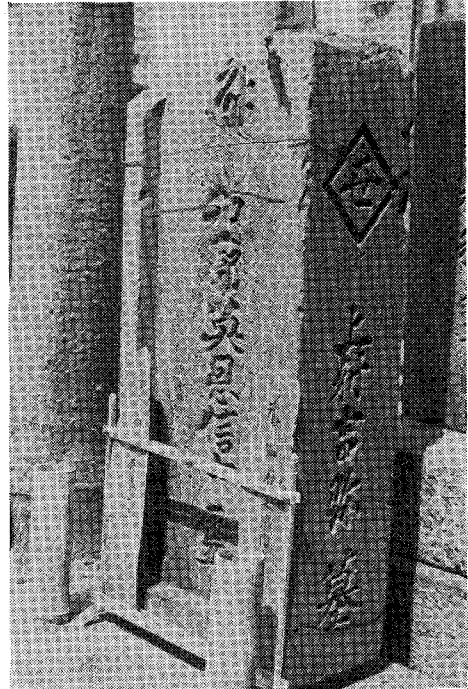
若原氏は吉弥の墓石であると思い、江馬先生の確認を得て、先生と



墓石のあった石垣



上村吉弥の墓



上村吉弥の墓

二人で取り出し、右の位置に安置された。とある。この吉弥の墓は現在も新京極裏寺町の常楽寺に当時のまゝの状態で安置され、西陣織の帯関係の方、浮世絵研究会、上村吉弥の名前を襲名された俳優の方が、供養されているとのことで、上村吉弥が実在の人であったことが立証される。

上村吉弥から起ったと考えられる帯丈の長さ、帯巾の広さは元禄になって少し短くなっている。元禄年間刊「女重宝記」の中には、「帯のこと絹一幅の大ちらしのそめ帯長さ八尺(80.33)」にして前むすび、これ今はやり風なり。生まれつきの玉腰の太細にしたがひて帯のひろせば、かつこうあるべし。」とあって、この幅は漸次人々の定める所となったようである。西鶴作の浮世草子には広幅、中幅、幅狭など、いろいろの広さのあることを記していて、当時帯に融通の利いたことを証している。前期の男子帯は女子に比べて巾は狭く、女の二ツ割が男子は三ツ割という標準であった。帯地に就いては、十五、六才の縹子、二十四、五才の繩帯、三十才の糸打、階級、職業、境遇で分けると、大尽、遊客では紛織マカヱ、若衆に縹子、畝帯、俠客の染分の組帯、職人は小倉、西陣、奥島、商人の龍紋、色では若衆の鹿子、茶、紫、縫分縹、宗伝唐茶、薄ネズミ、薄樺茶、商工の青茶、小紋、黒などの例が西鶴の「草子」にある。当時は組紐帯とくけ帯とで、組紐帯は平打と繩状のものとなり、染分となるものもあって、名護屋帯が男子に移った。くけ帯は以上の地質色目で、文様には鹿子もあったが、多くは無地、小紋、縹物である。文様を浮世絵で見ると、矢張り無地もの、小紋もの、縹ものとなっている。小紋形には七宝文様などがあ

り、縹は縦縹が多く、後、横縹も出来、格子、亀甲地の中に花形などもあった。若衆などには、婦人向の大きな文様があったようである。

女帯の地質は、金襴(独子)緞子、縹珍(昔々物語)などは古く、天和から元禄にかけては、「西鶴俗つれぐ」 「好色一代女」 「好色一代男」 「好色二代男」 「好色三代男」 「男色大鑑」によると十四才で黒天鷲絨、縹子、十八、九才で木綿の小倉、二十才で糸屋帯、四十才で稻妻織、階級、境遇、職業で分つと、妻の回々織モルル、後家のあつち織、奉公人の縹子、龍紋、縮緬、今織、遊女の縹子、今織、越後晒、縹珍、比丘尼の縹子、その他ならべ縹、緞子がある。

色に就いては、寛永には黒地、天和から元禄にかけては、十四才の樺色、黒、二十才の紅縹、妻の茶色、遊女の茶色、赤色、淫売のネズミ色、黒色、上臈の紫、下女の白、その他黄唐茶、花色、「女重宝記」には、「帯は中ごろはやりし茶縹子、花色縹子など、老若にかよい目にたたずよきものなり。」とあって、元禄頃はめだたぬものをよしとしたものらしい。天和年刊の書に、「塩吹や、あせのららきの鯨帯」とあるのは、表黒、裏白の「昼夜帯」のことで、鯨帯とよばれるのが、この頃から生じたものである。又「染分けの帯」と言うことも行われ、「好色五人女」にも「十二色のたぐみ帯」「段染の一巾帯」「西鶴織留」にも「百品染」と言うことが記されている。延宝頃の名優女形の開山伊藤小太夫の紫鹿子の帯から小太夫鹿子が流行し出したのは有名である。文様については、下女に白縮緬に梅の花葉を散らしたものの、遊女、娘の石畳、牡丹唐草金入の帯、殊に百羽雀の切付段染(好色五人女)、小鳥づくしの織縹に白糸の綱をかけ(西鶴俗つれづ

れ)、つばくらの縫取に紫色の綱をかけた(男色大鑑)など、贅沢なものであった。又浮世絵に表れた女帯の文様は、図案的と絵画的とに分かれ、図案的では直線のものに横縞、親子縞、亀甲、紗綾形、菱、曲線のものに立涌丸、七宝、絵画的のもので自然物には雲形、建造物では垣、植物では梅、桜、牡丹など、器具では矢の羽などで、図案、絵画混合したものもある。江戸初期(寛永頃)には松、梅、桜の模様を黒地に織りつけた帯を「鉢の木の帯」と云って珍重したと云って居る。(独語)文様の配置は、散点したり並列して居るのが多く、雲や松皮菱で境をして文様に変化を与えたものもある。加工法は織、染に繡、描絵、切付もあつたらしく、染は鹿子紋、三浦紋も行われた。又小紋もこの頃用いた。切付は別の裂を縫いつけるので、摺箔や金糸の刺繡も行れたようで、正保三年刊「十二段冊子」に「箔の帯」とあり、寛文十二年刊「諸国独吟集」に、「腰元のは、するも殿の御執心ちきりも結も縫箔の帯」とある。意匠で最も多いのは無地で、文様としては縞が多く、丸の文様は随分多かつたようで、絵画に多く表れて居る。一般庶民階級では模様は乏しくて、ほとんど縞珍が流行し、縞物が主であり、娘さんには鹿の子が用いられたようである。又帯の下にする抱え帯は、しごきのごとで、明暦、寛文頃から段々と多くなり、天和から貞享の初め頃までは前で、それ以後は横で結ぶことゝなつたと、近世風俗考に記されて居る。婦人は天和から享保にかけて、帯の下に之を結んでからげて外出したので、縮緬で作り、西鶴には紫や虹染の例もあるが、紅なども多かつたらしい。延宝、天和、貞享頃は紫、元禄の頃は水色が流行したと伝えられて居る。

中期には、八代將軍吉宗が勤儉の治を始め、自ら綿服を着て一汁一菜の節約の模範を垂れ、一面には殖産工業の隆盛を計つたので、各国に染織が起つた。当時の男帯、女帯の巾は、享保年間刊「万金産業袋」によると、巾二尺五寸(94.7cm)、丈一丈二尺(45.5cm)で、男のは三ツ割、女のは二ツ割とする。併し品物によつては、多少その寸法を異にするものもある。又男帯は、「反古染」には享保には巾二寸(7.6cm)、三寸(11.4cm)、元文には四寸(15.2cm)、五寸(18.9cm)、よりだん／＼広く、宝暦より巾狭く、安永には丸ぐけの紐のようで、天明から元文に返り広くなつたとある。男帯の地質は、享保には、縞縺子、緞子、博多、紋質、綸子、縺珍、七子、黒飛さや、袖縞、元文には、丹後琥珀、昼夜織、宝暦には、黒琥珀、縺糸直田、縞縮緬、上田変り縞、八丈織、元明には、緋博多、緋緞子、紫飛(反古染)その他洒落本には、統と、風通、縺子、壁ちよろ、縮緬、緞子、とろめん、七子、紗綾、小倉、親和織の名が見えて居る。色目では「反古染」には、黒鳶、紫鳶、又洒落本の中を見ると黒、萌黄、鶯茶、花色、柳茶、鼠、白茶などがあり、当時の流行の色目を知ることが出来る。明和、安永頃の緋無垢帯で、一名「腹切帯」と云われ、猫ぢやらし結び流行し、粋な人に喜ばれた。

安永風俗に男が緋博多、緋緞子の帯をしたのが流行し、とび色の羽織に赤帯見えり、とある。

女帯では、享保に、縞縺子、縺珍、緞子、縮緬、宝暦に、真田帯、回々織金人、明和に、縺子、織留金人、安永、天明に、天鷲絨、更紗、の帯が見えて居る。帯色は鶯萌黄緞子の広巾帯、萌黄博多の帯、

茶地の金なし回々織に唐花織りし帯、黒天鷲絨に金更紗織と腹合せ帯、鶯茶縮子帯、浅葱博多、浮世絵からは、黒、茶、紫、萌黄などの色が最も多いようである。明和には「腹合せ帯」がやはり、結び方は、ほとんど後ろになってきた。文様は男女とも無地が多く、次に横縞、斜縞が多い。婦人の文様としては、市松、亀甲、松皮菱、などの直線文様から、立涌、七宝、円などの文様にすゝみ、多少写生風の文様があっても、同型を反復、散在させるのが普通であったが、天明頃から帯巾が広くなるにつれて、自在画風の変化の多い文様を用いるようになった。又筋も縦縞が追々用いられたのは、文様が平面から立体に進んできたのである。又それらの意匠に用いられた色彩の種類は、大体二色位であったが、宝暦頃には三色位のがだん／＼流行し、明和、安永頃には色彩もよく調和する色彩を用いて意匠を作っていることである。浮世絵美人画の帯の色がよく調和し、例えば黄色地に薄紅、薄縹色の立涌、薄黄、薄鼠に薄紅の筋を入れた縞帯が優婉な情趣を醸るのは、現代に於ける帯の色などにも考えさせられることである。帯の文様では、佐野川市松丈（元禄）から起った市松文様が流行し、当時俳優から起った文様は、中期には大へん多く、三井親和の能書を文様とした親和織があり、帯に文字を入れることが起った。「悪世物語」に「菊寿の帯」とあるのもその文字を文様としたのであった。この時代は衣服の華美が圧迫された時代で、それが田沼父子の専攻時代には再び反動的に華美になったが、それは衣服よりも、髪風と帯とに意匠の改革があり、衣服の無地、小紋、縞、緋に対して、帯は無地、大紋、縞が生じ、衣服の単純な意匠を帯を以て補うことゝなっ

たのである。そこで、女帯は時代を経るに従って巾が広くなり、結び方も大きくなって、後ろが多くなり、髪形の華美と対照することゝなった。日本の衣服に於ける帯は、こゝでその優美を助ける大きな要素となり、衣服に対して切りはなして考えられない背面の美的効果をあげる、重要なものとなったのである。遊女には「しごき帯」があり、これは芯の入ったものもあつたが、芯なし帯が大部分で、白縮緬のもの、鶯茶縮緬のものがあり、浮世絵には紫鹿子、水色鹿子などが多く描かれて居る。又女官、御殿女中には「附帯」がある。これは寛永頃からの女帯が後世まで依然として残つたので、夏期帷子の時に行われた。形式は巾三寸袋に付けてあり、長さ四尺（151.5cm）両端に芯を入れて丸くしたものである。錦、金襴などがある。冬は附帯を用いず、巾四寸位の緞子の帯を前で結び、上に搔取を着、外出にはからげたものである。後期の男帯の長さは一丈（375cm）、巾は鯨尺一寸八、九分（6.8〜7.2cm）が普通で、二寸（7.6cm）は巾が広く、一寸七分（6.4cm）は狭いものである。これの八分ものは八分山と云う。嘉永には二寸の巾の広いものを好む向も出来た。中流以下には昔ながらの曲尺二寸（6.06cm）巾の真田紐を用いる風もあつた。

女帯は巾が天明頃、驕者の風潮は益々増長して文化には一尺五分（39.8cm）となつた。男帯の地質は、之は京阪庶民の若者は博多、中流の若者、丁稚は紗綾を用いたが、漸次一般に博多の模造を喜ぶようになり、後期を通じて貴賤、貧富、老若を問はず博多が全盛となり、真物を本博多、価格は一両一、二分、模造は京、甲州（山梨県）で作られ、価格は三分、上野では一、二分のものもあつた。又平常には錦

博多を用い、価一分あるいは銀二十匁、小民や丁稚には小倉があり、中以下には真田紐、天保前三都武家雇夫、芝居木戸番は羅紗や八丈島の八端を用いた。天保始めの京阪労働者は「へるへと帯」天鷲絨を用いた。色目は前期とあまり相違はなく、博多は男帯に黒が多く、白あるいは茶の一筋、子持縞を織出したものが多く、媚茶、紺地は之に次ぎ、白地はなくて、浅葱もまれであったが、子供と力士には赤があった。小倉は革色、茶色、紺色があり、羅紗には白、萌黄、黄茶があり、博多は表裏同色のものと、裏色が異なるものがあったと云われる。文様は博多で流行したのは「独鉆」と云うので、仏具の独鉆や三鉆に似ていたからである。その紋の一条を「一本独鉆」、二本を「二本独鉆」と称し、大小独鉆二筋のもあり、紋や地色が同色なものを「供独鉆」、紺を交えたのはあったが、他の色はまれであった。「船越」と云う紋は地に格子があつて、その上に独鉆があるもので、旗本の士、船越某が始めて之を用いたと伝えられている。小倉や無地、縞もあつたが、独鉆にはない。博多に「献上形」と云う文様があつたが、嘉永からは「献上形」と並んで「船越形」が流行した。以上のように男子帯の意匠にはあまり変化はないが、紙子で作られた帯もあつた。女帯の意匠は、浮世絵などによると、無地、縞物、図案的な文様、写生的な文様、に分類することが出来る。無地は文様がなく、娘、妻にも用いられ、色は紅が最も多く、花田、鼠、鬱金、黒などがある。無地物の流行は前期からも続いて居る。縞物も前期からであるが、次第にまねになり、後期のような縞物の衣服の流行には縞の帯は調和しない。紺などの場合でも縞帯は合わないで、すたれていったと思われる。

図案的な文様は、前期から発達しかけて居たが、この頃になって、大いに発達した。それには有職文様、その他新しい文様に硬化した図案が羅列され、動植物、自然界が主な材料となって進出して来た。文様には新しいものが多く、例えば丸とか四角、七宝、亀甲、紗綾形などと、正確な纏った形となって、その中に文様が填充されて居るものが多い。写生的な文様は植物、動物などの写生風の自在な文様とした斬新なものも現れた。然しこれとても無拘束に作られた意匠ではなく、帯の文様として、作られていることは面白い。歌麿の絵には、大きな芭蕉の葉が長く描出されていたり、唐草が散乱して居たり、大胆な文様がある一方には、極めて細密な文様があつて、亀甲の中に幾多の花が一つ／＼綿密に填充されているなどの模様もある。又以上の四種混和を折衷したものもある。色調もこの頃になって多種となり、帯の織染に多数の色彩を加えることは、この期の特徴のようである。享保以来技巧としても織染が主なもので、従来の描絵、摺箔、刺繍、切付などが行われず、染では糊置、板締、鹿の子などが、行われていたらしいが、これに関する資料が乏しいので残念である。しごき帯は、矢張り遊女の間で行われ、前期のように無地だけでなく、鹿子、小桜、麻の葉、など色々な染文様が出され、紅、白、水色、紫など、種々の色があつて、帯の下からげと、帯止のしごきを用いることもこの時期から漸次起つて来た。又衣服丈が長くなって、家では引きずる風習が起つた為、外出にはどうしてもからげねばならず、従つて抱帯が再興したのである。しかし古い抱帯は対丈の衣服を外出の時に短くする為であつたが、後期のからは長い衣服を対丈する為である。

「丸ぐけ帯」は中世から僧侶が用い、又民間では小児にある。「三尺帯」は染木綿布を裁縫せずにそのまゝ数尺に切つて男子の帯とした。これらは職人階級のもの、又白地木綿布は多く下級士分者の帯するものであった。最近成年男子や子供に用いられている「へこ帯」は明治初年に起つたものである。以上のような状態で江戸時代に於ける男女の帯は、明治に入り、大正、昭和と現代に及んできたのである。又足利時代より発生した能も徳川期に入つて、衣裳も帯も大いに発達し、絢爛たるものが出来た。それは民間にも影響があつたに違いない。以上で私の帯の文様、地質、色目の研究を終りたい。

結 び

帯が紐帯であつた時代から、男女装共に様々な発達変化を示してきたが、近世小袖服飾の発達は、その単純な衣服構成、外觀の単調な線に対して、帯の豪華さが求められ、質においても主服に劣らない貫禄が必要となつてきて居る。そして和服と一体となつて女性の服飾美をつくり出しているが、帯は着る人の体格、背の高低なども調和されてこそ、女性の後ろ姿の美しさ、ひいては女性の美しさを發揮しているのではないだろうか。又帯にはその裝飾性の他に、機能性、精神的な面も考えられる。機能面では、巾、丈、及び結び方の単純さが要求されると思う。尤もP・T・Oに依じて帯の地質、文様、色目、結び方に重い軽いのあることは当然である。結び易く、しかも美しい結び

続 江戸時代の帯の研究

方、それには締めて形にした時の巾、長さが着る人の体型に合わなければならぬ。又帯の地質、縫製、色、文様にも関係してくるであろう。江戸時代ではその初期に、すでに自分の体型に合わせて帯の長さ、巾を決めて締めていたようである。精神面では、帯を締めた時に自づと感じる緊張感と情緒的な気持が湧いて来るのは、和服と帯の持つ特色だと思ふ。江戸時代小袖の発達と共に、帯も発展し、美観上から又実用面から服飾の一として非常に重要な位置を占めた。従つて和服が存続される以上、永久に残つてゆくであろうが、その発展には、時代の生活様式にマッチし、完成された美しさを持つものへと変化されてゆくであろう。

終りに各時代の帯の長さとか巾、縫製について更に研究したかったが、いかにも資料の不足で研究の不備に了つたことは遺憾である。本論文を御指導して下さい江馬務先生に深甚の謝意を表したい。

参 考 文 献

- | | | | |
|--------|-------------|-------|------|
| 江馬 務 | 風俗研究(28号) | 風俗研究所 | 昭・13 |
| 江馬 務 | 日本服装小史 | 星野書店 | 昭・40 |
| 江馬 務 | 江馬務著作集(第三卷) | 中央公論社 | 昭・51 |
| 石崎 忠司 | 帯の趣味 | 徳間書店 | 昭・35 |
| 和田 辰雄 | 日本服装史 | 雄山閣 | 昭・35 |
| 金沢 康隆 | 江戸服飾史 | 青蛙房 | 昭・43 |
| 後藤 守一 | 衣服の歴史 | 河出書房 | 昭・30 |
| 河鱒 実英 | 日本服飾史辞典 | 東京堂出版 | 昭・47 |
| 近世風俗辞典 | 人物往来社 | | 昭・42 |

続 江戸時代の帯の研究

- 風俗辞典 東京堂 昭・47
日本風俗図絵 (第六摺、第三摺) 西川祐信筆
北村 哲郎 日本服飾史 衣生活研究会 昭・48
浮世 絵 毎日新聞社 昭・46
吉川 観方 帯の変遷史 いづくら織物KK 昭・36
永島 信子 日本衣服史 芸艸堂 昭・43
神阪 雪佳 日本女装 (一ノ七) 芸艸堂 明・39
西村 兵部 日本伝統衣裳第二卷 (毛利家伝来衣裳) 講談社 昭・43
梶山 伸 日本伝統衣裳第三卷 (前田家伝来衣裳) 講談社 昭・43
守田 公夫 日本被服文化史 柴田書店 昭・40
講座日本風俗史 (第二卷) 雄山閣 昭・33
浮世 續 米山堂 大・13
浮世風俗やまと綿絵 (上巻) 日本風俗図絵刊行会 大・7



縞の帯(奉公人)
西川祐信筆 江戸中期(享保)



男帯 江戸前期(天和)
浮世續抄出



帯をしめる姿(つり物女) さや型と文様
西川祐信筆 江戸中期(享保)



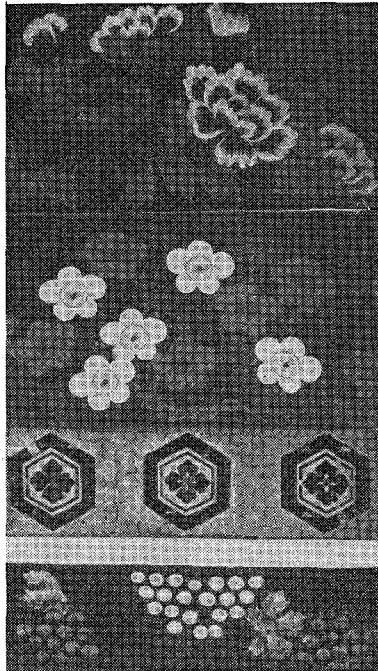
機織にみる小児の帯 鈴木春信画
江戸中期(明和)



菊 寿 の 帯 西川祐信筆
江戸中期 (享保)



市松文様と無地と縞の帯
日本女装抄出 江戸中期 (安永)



上から
天鷲絨萌黄地牡丹 (前田家伝来衣裳抄出)
梅模様繡襦下帯 (前田家伝来衣裳抄出 江戸後期)
男・白茶地亀甲花文縫い 能の腰帯
女・萌黄地葡萄文様 } (毛利家伝来衣裳抄出 江戸後期)



遊女の鯉の瀧登りの文様 磯田湖龍斎画
江戸中期 (安永)